

「襲いかかる不安との戦い」

平成三〇年

日本はいまや低成長の時代、低成長ならではの生き方それが大事

人間は何のために生きるのか考えたことはありませんか。子育ても終わり、普通、日常の暮らしの中で「何のために生きているのか」などという根源的な問いかけはしません。「もつと長生きしたい」と請いねがうのはどうしてなのか。

人には「何がなんでも生きたい」という本能がある。

「生存欲」という人間の持つ根源的な欲求です。笑われるのを承知で言えば「この世界がどう変わっていくのか見たい」だけなのです。皆さんはどう考えるでしょうか。

少子高齢化から超高齢化社会に入りこれから起こるのは「大量自然死」

団塊の世代が一気にこの世から去っていくことになる時代です。

そこで生きるための哲学ではなく「死の哲学」なのではないか。そして、科学や宗教は、そこでどんな役割を果たせるのか。

「自立した生き方」を模索するしかないのかもしれない。

そのための条件は、後世を生き抜くための経済的基盤を自力で築くこと、健康も大事です。医療技術の進歩の結果、簡単に死ぬことができなくなりました。自分の意志とは関係なくこの世に生まれて、しかるべき人生を全うした後に「退場」する時ぐらい自分の意志で決められないのか「尊厳死」も長い間議論されながら、日本は法的に未整備で社会的容認には程遠いのが現実です。

死生観の確立「いかに生きるべきか」すなわち「どのように逝くか」を突き詰められるのは宗教の力かもしれません。

某保険会社のアンケートによれば未婚女性が相手に求める最低年収は四百万円〜五百万円とした人が三割強で最も多いそうです。とても非正規で稼げる金額ではないのです。また、「結婚に関するアンケート」では、独身者の実に四分の一は「結婚したくない」と回答し、男性の十六%強が、「経済的な不安がある」ことを挙げている。少子化がますます深刻になり、一人世帯の高齢者が今後ますます増加する。

豊かな国に広がる「不安」日本は、GDP（国内総生産）アメリカ、中国に次ぐ、世界第三位です。

都会では高層ビルが林立し、電車や車がひっきりなしに行きかう風景は「豊かな国」に見え

ます。ところが、人々はみな「漠たる不安」に苛まれている。地震、津波、噴火といった自然災害から、病気、老後、年金破綻、テロ、戦争、ハイパーインフレ、国家財政（国の借金は現在1、100兆円）、アベノミクスで日本経済はよみがえった。という人もいますが。オリンピックの後、超高齢化社会に突入し東日本大震災発生した直後「直ちに健康被害をもたらすことはない」という政府発表が繰り返され、多くの国民はそれを信じていますがその根拠は全くありません。

一定の知識のある人は今後数十年後にはそれによる大量死が「将来何十万人もがガンで死ぬ」専門家の発言は「絶対大丈夫」から不確かなものだったからです。小泉元総理、細川元総理が立ち上がり原発ゼロ法案を推進、政府は限りなくゼロにしていくなが、当面は原子力規制委員会が再稼働を認めたものは進める。為政者、指導者、専門家、マスコミなどもますます信用されなくなっています。国という権威は、何でもできる。

人間の命を、紙切れ一枚で戦地に引っぱりだすこともできる。一強の独裁政党により国に寄り添うことも危険をはらんでいます。つまり事が起これば言い逃れや当事者はこの世にいません。つまり政府の言うことに従っていればまちがいないと信じる人は普通の大多数の真面目な日本人なのです。そのように仕組まれてきたそれを国民が正しいと思ひ込み支持しているからなのです。今何が起きているか正しいことを国民が知らないだけなのです。

「森友問題」、「加計学園の問題」、「今回のスーパーコンピューターの問題」今だ、解決していません。人間社会が引き起こしたことで「真実は確実にある」のですが、知らされないだけなのです。知ったら大変なことになり都合が悪いからうやむやにして解決しようとしただけなのです。批判めいたことを書きましたがそれと同じことです。

マスコミ、NHKまでも正しいことは報道しません。むしろそうした不安からいかに国民をはぐらかし、平穏な社会であると洗脳していくしかないのです。恐ろしいことです。今では「ギャ・ウハア、ウハア」と笑う番組が横行し平和そのものです、若者から年寄りまでスマホやゲームで明け暮れ、気付いたときにはこんなはずでは・・・と、第二次世界大戦から戦後七〇年余りしかたっていないがまた歴史は繰り返そうとしています。

これから先のことを予想してみても皆さんはどう思われるでしょうか、はたして日本は、自分自身は、「どう生きていけばよい」のでしょうか。これから起こりうることを具体的に書き出していけばどんなことが起こるのかが見えてきます。大変恐ろしいことです。

近い将来起こるであろうことの中で東南海地震の恐怖、首都直下型地震、地球温暖化によ

る（気象の変化による）災害をはじめ超高齢化社会がもたらす日本社会は、直面したのではない夥しい「死の時代に」向き合うことになるのです。

二〇一九年には、IT技術者が不足し始め、技術大国の地位が揺らぐ、オリンピック開催される二〇二〇年には、女性の二人に一人が五〇歳以上になり、団塊の世代が後期高齢者になってくる二〇二一年オリンピックの次の年は、大量の介護離職が発生する。

二〇二三年には、企業の人件費がピークを迎え、経営を苦しめる。

二〇二四年には、三人に一人が六十五歳以上の「超・高齢者大国」になる。

二〇二六年には、認知症患者が七百万人以上になる。

二〇二七年には、輸血用血液が不足する。

二〇三〇年には、百貨店、銀行、老人ホームも、地方から消える。

同時に自治体も次々と縮小、消滅する。

二〇三三年には、全国の戸建て住宅の、三戸に一戸が空き家になる。

過疎地域はもっと早い時期から進み空き家のほうが多くなる。

また、広島県でも四人に一人はすでに子供の貧困が叫ばれています。格差は広がるばかりです。選挙では教育無償化を叫んで得票を得んがための手段で政治家は聞こえの良い表現しか使いません。所得税を支払わない世帯を無償化つまり生活保護世帯のことです。日本国憲法に国民は平等に生きる権利があります。少子高齢化社会で憲法改正の根本は皆さん何だと思われませんか？ 答えは言わなくても深く考えればわかることで、あえて書きませんし書けません。知識人や専門家はもちろん指導者もわかっています。

もっと先のことを考えると自分の子や孫の世代、想像するだけで大変です。しかし、大人として今できるのはそうしたことを考える指導者が次世代を考えた取り組みをしているかどうか、また国民みんなが今考える必要があるのです。

日本がいつまで存続できるか不安です。自分勝手な生き方は日本社会のコミュニティーの崩壊が家族関係におよんでいる現実を映し出しているように思えてなりません。孤独死、単独死する可能性のある社会がこれから増加してくる（もうすぐです、2030年には一人世帯が四割に達する）ことを考えると後世を考えた生き方をしなければならぬことに耳を傾ける必要があると思うのです。

子供や配偶者がいるにもかかわらず三割もの人が孤独死しているのが現実です。（独りで生まれてきて、独りで去っていく覚悟、家族に支えられながら過ごしてきたにもかかわらず、日本社会の歪みなのか、それとも人間とはそういうものなのかとも思います）これらの影響は自分の住んでいる地域や自分の立場で変わってきます。要するに超高齢化と少子化社会、人口減少をどうするかなのです。

多くの国民はこうしたことを考えてはいないでしょう。ましてや叱られるかもしれませんが五十歳代までの多くの人は（一部の人を除いて）毎日を安穏と暮らしているのが現実のすがたでしょう。

昨年の暮れ会社百周年記念の会合で、ある書物に、周囲に惜しみなく愛を注いだ人が、何とも言えない不幸にみまわれたことや、悪が栄えて、正義が敗れることなど考えると、それを「苦」というのであって、「苦」の世界の中で「歓び」を求める。これが真の「生き甲斐」であると……。

企業の中でもよい時期もあれば悪い時期もあります。いくら努力しても報われない。逆に何もほとんどしなくても結果が良いこともあります。しかしそこには必ず顧客への要求に答えるだけの準備はしています。この準備こそ企業存続のための各人の「働き甲斐」のある職場にしていたからなのです。何もしないのではなく常日頃から全員が同じ方向を向いて努力していたからなのです。

幸せな家庭、幸せな人間関係、幸せな老後、幸せな死に方……どれをとっても、かなり困難をとまなうもので、それを求め続けると強いストレスを感じます。人生はまさにストレスと「苦」の中で生きているのです。ストレスをなくすることはできません。その日その日を、丁寧に生きる。

もっと端的に言うならば浄土真宗の中興の祖といわれる蓮如上人はその書き物の中で、「朝には紅顔ありて 夕には白骨となる身なり」と述べています。

明日をも知れぬ命を生きているのが、われわれ人間なのですから。つづく